ウィザードライセンス

七篠雅大

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ウィザードライセンス

【Ｎコード】
Ｎ６９３１Ｙ

【作者名】
七篠雅大

【あらすじ】
魔法使いって言っても、そんなに便利なもんじゃないですよ――。
そう諭してみたものの、あの鬼社長は俺を雇用しやがった。
トラブル解決屋「ＮａＮ」の社員たちと社長が繰り広げる、魔法２割・雑談８割のアクションコメディ。
……評価とかコメントとかくれたら、かなり喜んで一日中ハイになります。

第一話　俺からの依頼

「意外だな。君がまだガスや水道を使っていたなんて。公共料金もバカにならないだろう？」
　時刻は午後十時。葉瀬川黒、性別女、年齢不詳、職業トラブル解決「ＮａＮ」社長を部屋に案内すると、いきなりそんなことを言われた。
「いやいや、当然だと思いますよこれぐらい」
「そうか？　でも君なら指から火を出せばいいし掌の器に水を出せばそれで済むと思うんだが」
「いちいちそんなことやってたら、今度はエンゲル係数が大変なことになりますよ……」
　いくら魔法を使えるからと言っても、何もないところから何かを生み出すことはできない。対価として自分の体内のエネルギーがかなり持っていかれるのだ。当然、腹が減るし、それ以前に乱発していたら体がいくつあっても足りない。
「それもそうだな。この間一回やってた雷落とすヤツとかは、もうなんか死ぬ一歩手前って感じだったし」
「それを見て腹抱えて笑ってたのはどこの誰でしょうかね」
「あ、それアタシだわ」
　悪びれる風もなく言うのでたちが悪い。
「『新魔法開発した』とか言うから見てやろうとしたら、張り切りすぎてでっけえ雷落として体力九〇パー以上使い果たすとか……笑い話にしかならんだろう。あ、思い出したらまた笑えてきた」
　くっくっくと笑いを漏らす黒。前から思っていたが、性格悪いなこの上司。
「はあ……。なんでもいいですけど、そろそろ本題に入りましょうよ」
「ああ、そうだったな。確か、君から依頼があると言っていたな。

分かっているとは思うが、社員でも金は払ってもらうぞ」
「まあ、そういうと思ってましたけど。六万は痛いですよ……」
渋々財布から諭吉を六人取り出して、黒に手渡した。
「毎度あり。あ、前から思ってたんだが、毎度ありって初めての客にも使っていいものなのか？　毎度じゃないのに」
「さあ？　次からもよろしくって意味で使えば問題ないんじゃないですか？」
「おお、なるほど」
本気で感心したように黒が言った。性格悪い上に、どこかズレている。まあ、ズレていなければ「トラブル解決屋」などという胡散臭い商売はしないだろうが。
「で、依頼内容は？」
「えーとですね……」

話は、一週間前にさかのぼる。
俺、吉川芳紀、性別男、二〇歳、職業トラブル解決屋「ＮａＮ」社員、魔法使いがこの部屋に越してきた時の話である。
一通り荷物や家具などを新居――二階建てアパートの一室に運び込んだ俺は、いろいろと困ったことになった。
とりあえず一段落したので、覚え立ての煙草でもふかそうかとベランダに出た。ライターどこやったっけとポケットをまさぐるが、出てこないので、仕方なく指に火を灯した。一瞬だけで良いし、火の大きさもそれほどではない。体に支障をきたすほどの魔法でなければ、まあたまにこうして使うことはある。
しかし問題はそこにあるのではない。
隣人に、その場面を目撃されてしまった。
「どうやって火を出していたのか」などとしつこく問いつめられてしまい、もうヤケクソだどうにでもなれといった調子で自分が指から火を出すどころかいろいろなことができる（要するに魔法が使える）ことを教えてしまった。初めは何かのトリックではないかと

疑っていたようだったが、本当に種も仕掛けもないということが分かると、隣人は「一人にさせてくれ」といって部屋の中に引きこもってしまった。
　おそらく、今までに見たことのない怪奇現象を目にして混乱してしまったのだろう。
　それだけなら、まだ良かったのだが……。

「翌日からですよ。早くこのアパートから出ていけって感じで、嫌がらせみたいなのが始まって。ポストに新聞の見出しの文字を切り抜いて作った『出ていけ』みたいな手紙が入ってたり、部屋の前にゴミが捨ててあったり……」
「ちょっと待ちな。どうしてお前が出ていかなければならない？」
「こっちが聞きたいですよ……まあ、隣の部屋の人間がバケモノだったらそりゃあ嫌でしょうに」
　自虐的な笑みを浮かべてみた。別に本気で言ったわけではないのだが、
「ばかもの」
と、黒に頭を殴られた。
「痛っ、何するんですか社長」
「自分のことをそんな風に言うな。お前はバケモノなんかじゃない、むしろばかものだ。……お前は、ちゃんとした一人の人間だろう」
　ふん、と鼻息荒く黒が言った。
「社長」
「何だ」
「優しいんすね」
　また殴られた。

「じゃあ、とりあえずお前がここでちゃんとのんびり暮らせるように嫌がらせを止めればいいんだな？」
「まあ、そういうことになりますね」

「ホント、魔法が使えるっつうのも困りものだな」
「この時代には合わないんですよ。あーあ、時空間魔法でも使って昔に飛べりゃあな……」
「ンなことしたら、お前死ぬぞ？」
「分かってますよ」
時間をねじ曲げるというのは、おそらく魔法の中でもかなり次元の高いものだろう。そんなものを使えば、俺の体の中のエネルギーはまるまる持っていかれ、走馬燈を見る暇もなく一瞬で果ててしまうであろうことは、想像に難くない。
「うむ……どうやったら嫌がらせが止まるか、検討してみよう」
「はい」
話し合いが始まった。このような仕事上の話をする場合、黒は真剣な表情になる。
「じゃあ、こんなのはどうだ？」
「何でしょう？」
「大規模魔法を見せつけて『嫌がらせすんなやオラ』と脅す」
「たぶん逆効果、でしょうね」
相手はこちらがそのような行動に出ることを危惧して、早く出ていけと言っているのだ。火に油を注ぐようなことにしかならないだろう。
「それに、そんな魔法を使ったら俺が疲れますし、何よりほかの住人にまで俺がバケモ……魔法使いだってばれますよ。そんなことになったら、事態が悪化するばっかりです」
「それもそうか」
難しいものだな、と黒が唸った。
「……普通に暮らし続ける、っていうのも悪くない手かとは思います。俺に危険性が無いってことを認めてもらえばいいわけですし」
「いや、そのイメージを覆すのにどれだけの時間がかかるかを考えると、どうにもそれじゃキツそうだな。毎日毎日家の前に残飯ベットリじゃあお前の気がおかしくなるだろう」

「そうですね……。はあ、いい解決方法はなしか」
結局、話合いは行き詰まった。
その後、まあとりあえず殴り込むかという結論に至り、芳紀と黒は隣の部屋を訪ねた。

ぴんぽーん
「すみませーん、誰かいますかー」
「そろそろ諦めましょうよ、社長。さすがに十分も家の前に居座られたら、向こうも困りますって。時間も遅いですし」
「困っているのはお前の方だろ？」
「いや、そうですけど……」
何度呼びかけても、隣人は結局出てこなかった。
未練がましく再度呼びかけを続ける黒を引っ張って、自分の部屋に戻ろうとしたその時。
「あら、そこに住んでいた人、一昨日引っ越しましたよ」
さらにもう一つ隣の部屋の住人が、親切にも教えてくれた。

「でも昨日も嫌がらせあったんすけどね。窓に残飯が張り付いてました」
「もうそれ警察に届けるか大家に言うかしたほうがいいだろう……」
黒が呆れたように言った。
「でも、隣の人は一昨日には引っ越してったんだから、あの人の仕業じゃあないってことですよね」
「まあ、そうなるな。というか、そもそもどうして隣の人間の犯行だと思ったんだ？」
「だって、あんなことがあった翌日ですし、わざわざ余所の人間が毎日律儀にイタズラしに来るとも思えませんでしたし……」
「そいつはお前の魔法を怖がっていたんだろう？　だったら刺激するような真似をするはずがない」
「ああ、確かに」

言われてみれば、隣の人間が嫌がらせの犯人だと断ずるには証拠が不揃いである。どころか、黒の言うように自ら仕返しを受けそうな真似をするというのは考えにくい。早とちりをしてしまったのかもしれない、と少し反省した。
「だが、隣人が犯人じゃないとなると、じゃあ誰がそんなことをしたんだ？」
黒が当然の疑問を口にした。
「さあ、職業柄どこで恨みを買ってもおかしくありませんからねえ」
「それを社長の前で言うとはいい度胸だな」
「でも間違ってないでしょう？」
「……そうだな」
渋々と言った顔で黒が首肯した。
「とにかく色々探るためにも、まずは腹ごしらえだな。飯にしろ」
思考を放棄したかのように、黒はごろりと寝ころんだ。いや、ここ俺ん家なんスけど。
「そうですね……えーと、何かあったっけ」
「鍋がいいな」
「いいですね、鍋」
いいですけど、鍋なんてできる経済力はないです。給料低いし、ついさっき諭吉六人さらわれたし。できたとしても湯豆腐までだ。
冷蔵庫を見ると、卵が二つ。あと、マヨネーズとドレッシングがある。いや、それだけしかない。続いて戸棚を覗いても、カップラーメンやらインスタントラーメンやらの文明の利器もとい利食は見当たらなかった。
「社長、残念ながら湯豆腐はできそうにありません」
「湯豆腐ってできても残念感があるけどな。あと私は湯豆腐を鍋だと認めん」
「なっ……！　湯豆腐おいしいじゃないですか、湯豆腐に謝れ！」
「そんなに好きか湯豆腐……。まあいい、だったら出前取れ」
時計を見ると、すでに十二時を回っている。さすがに無理だ。

「おっ」
炊飯器を見ると、かろうじてご飯が残っていた。これで何とかできないだろうか。
「社長」
「なんだ？」
「卵かけご飯って、湯豆腐の次の次くらいに美味しいですよね」

本日の夕飯。
ご飯一膳、卵一個（一人分）。
ちなみに醤油はありませんでした。

第二話　起床、そして出勤

「……ん？」
どうやら、昨晩卵かけご飯を食べた後、すぐに寝てしまったようである。時間は一時を回っていたし、仕事終わりに依頼を聞いて貰っていろいろと動き回ったので、俺も黒も疲れていたのだろう。
「あ、そうだ」
今になってやっと気づいたが、黒はどこに……。
ごそっ。
「う～ん……」
布団も敷かずに寝てしまったので、床の上ではあるが。
隣に黒がいた。否、寝ていた。
「おいおい……」
顔から、体中から血の気が引いていくのを感じる。もしやこれは「一夜をともに過ごした」ということになってしまうのだろうか。いやいや、やましいことなどなにもしていないのだから問題なかろう。しかし、見た目年齢で［自主規制］歳になる黒と寝たというのは、何とも気が重くなる。確かに黒はそれなりに美人ではあるが、見た目［自主規制］歳の女性、悪く言えばオバハンと寝る趣味はない。俺は……。
「俺は熟女趣味なんかじゃないんだあああ」
「うるするぇえ！」
翻訳すると、うるせえ、である。おそらく。寝起きでしたが回らなかったのだろうか。
黒のチョップが俺に襲いかかった。
「っ痛う……！」
「おい、朝っぱらからなに叫んでるんだ」
「社長も今し方『うるするえ』という奇声を上げたところでは……」
「お前のせいだ」

指摘されて思わず二の句をつげなくなる。
「って酒臭っ！？」
「当然だろ。飲んだんだから」
どうやら俺が寝落ちしてしまった後も、しっかり一人で酒を楽しんだらしい。
「ていうか多分俺の酒ですよね、それ」
「だから当然のことばかり聞くな。というか酒があるなら早く言え。卵かけご飯と一緒に飲んだ方が絶対うまかった」
俺の渾身の一品をおつまみ代わりにしないでください。
渾身といっても、それしかなかっただけだが。
「まあ酒代は後で給料から引いとくから安心しろ」
「足してください」
なぜ自分の酒を飲まれた挙げ句給料までさっ引かれるのだ。
「はあ……。もういいです、酒の話は。依頼を解決してくれるんでしたらチャラにします」
「そうか」
まだ本調子ではないらしい黒が適当にうなずいた。頭を痛そうにしているので、二日酔いだろうか。黒はぐるぐると首を回して、欠伸をした。

「とりあえずお前の件は夜に処理していくとして、今日も出勤しないとな」
「やっぱりそうですよね」
俺も黒も、一応は社会人である。時間はきちんと守らねばならない。トラブル解決屋「ＮａＮ」の事務所が開くのは午前十時だ。普段からそれほど客が多いわけではないので、この時間でも特に問題が生じない。
客が少ない故に始業時間は遅いが、なにぶんグレーな商売なので、それ相応のグレーな客もしばしば訪れる。そのため終業は午後十二時である。昨日早く仕事を終えた（といっても、社長は俺の依頼を

聞くという業務をしていたが）のはあくまで特例で、普段はかなり遅くまで仕事をしているのだ。
仕事といっても、本当に客が少ないので事務所の机についているだけなのだが。
「時計時計っと……」
「壁掛け時計とか置き時計とかないのか？」
「ああ、はい。一人暮らしする分には腕時計があれば十分ですし。目覚ましはケータイを使ってますしね」
もっとも、一人暮らしではそもそも時間自体さほど気にする必要もないので、家の中では腕時計も外しているが。
ごそごそと部屋の中を這いずり回って、やっとのことで腕時計を発掘し、時計をのぞき込む。
すでに、十時半を回っていた。
「社長」
「なんだ？」
「走りましょう」

俺の家から事務所までは、徒歩で五分、全力ダッシュなら二分の距離にある。そのため自転車や自動車などの通勤手段は用いない。それでも俺も社会人の端くれ、中古車ではあるが車も持っているし免許もある。
しかし、本来ならば、走った方が車で行くよりも近い距離だ。だから走ろうと黒に提案したのだがーー
「頭痛い。無理、走れない。車で送ってくれ」
ーーという鶴の一声で、結局車で事務所に向かうことになった、のだが。
「この距離で渋滞かよ……」
「全くだ。何をしているんだ。ぐずぐずしている暇がないことぐらいわかっているだろう」
「アンタよりはわかってるよ！」

そう言ってみても、黒はいつものように、悪びれる風もなければ全く動じてもいない。いや、「悪びれる」とか「申し訳なく思う」とかいう単語は、この人の辞書には載っていないのかもしれない。

なら仕方がない、と諦められる問題でもないが。

「何をしているんでしょうね、ホント……」

そして、誰のせいでこんなことをしているんでしょうね。

カーステレオに付いた液晶には、「１０：５２」という時刻が表示されている。これほど大幅の遅刻は、基本真面目な俺にとっては初めてのことだ。

「はあ、こりゃ幸崎さんに怒られるだろうなあ……」

「あいつは厳しいからな」

「せめて社長もあれくらい厳しくなってくれたらいいんですけどね」

「安心しろ、アタシは遅刻くらいじゃ怒らない広い懐を持っている」

「ありがとうございます。でもせめて自分にだけは厳しくなってください」

「嫌だね」

にやにやと笑って黒が言う。弄ばれているようで良い気がしなかった。

結局、事務所に到着できたのは午前十一時を回った頃だった。

第三話　危ない仕事

「ふう……おはようございます……」
「遅いよ芳樹君。遅刻一時間以上なんて、新人のする事じゃ……って黒さん！？」
「よっ、幸崎」
事務所に到着した俺と黒を出迎えたのは、幸崎霊華、性別女、二六歳、トラブル解決屋「ＮａＮ」の社員だった。非常に厳しいが（黒曰く「指導癖」）、柔和な笑みを作ることもできる彼女は、基本的に受付の仕事に回っている。
今日もその指導癖で俺に注意をしようとしたようだが、黒を見てよほど驚いたのか、しばらく口をあわあわとさせていた。
「どうした幸崎？　なんか変なことでもあったのか？」
「……黒さん、昨日確か早退して吉川君のところに……」
「ああ、行ったな」
「ですよね……。おまけに黒さん、なんかお酒のにおいするし……。それで、一緒に出勤って、まさか昨日……」
わなわなと震える霊華。なんだか、嫌な予感がした。
「ああ。寝たぞ、一緒に」
「何でそういう言い方しかできないんですか社長！」
「やっぱり、そうなのね！　そうだったのね！」
そうだったのねー、と叫びながら謎のハイテンションで乱舞する霊華を後目に、黒は「ん？」という顔をしている。本当に意味が分かっていないのかもしれない。
そんなんだから結婚できないん……。
「痛え！」
黒から前振りなしにチョップが襲いかかった。
「なんで殴るんですか！？」
「いや、なんか失礼なこと考えてたっぽいから」

「まさか……俺の本音を見破っただと！？」
「そこで本音っていったらいろいろアウトだけどな」
黒が苦笑いした。あっち系のことは鈍くても、こういう自分に対するイメージなどのことには鋭いらしい。野生の本能のようなものなのだろうか。
その後、未だに乱舞を続けている霊華をなだめるのにしばらく時間がかかった。

「そう、依頼の話をしてたのね。……でも、それが遅刻して良い理由にはならないわよ？」
「すいません……」
「まあ今回のことは大目に見てあげるわ。なんか大変そうだし」
大変そう、というのは、俺が黒に出した依頼の内容のことだろう。
「ただ、いくら時間がないと言っても、着替えくらいはしてきてほしかったかな……そのシャツも何も、昨日のままじゃない。お風呂も入ってないんでしょ、どうせ」
「うっ……」
たしかに、本当に必死で急いできたので今まで気づかなかった――というか気が回らなかったが、俺も黒も服装は昨日のままだ。まあ、黒に関しては着替える服自体がないので当然だが。
風呂に入っていないので、体臭もかなりきついのかもしれない。それでも、黒の酒臭さと比べればましである。……と、信じたい。
「とりあえず、奥のシャワールーム使って良いから、さっさと行ってきなさい。どうせ客はほとんど来ないんだし」
「ここシャワールームとかあるんですか！？」
「知らなかったの？　一仕事した後に入るお風呂は気持ちいいよー？」
お風呂と言ってもシャワーだけなんだけどね、と霊華が付け加える。まさかこの謎事務所にそんな施設があったとは。
「替えのシャツもあるから用意しとくね。ほら、黒さんも早くシャ

ワー浴びてきて」
「んー……頭痛い……」
「まったくもう……」
霊華が俺に説教をしている最中、黒は、二日酔いの頭痛がまた襲ってきたのだろうか、ノックダウンしていた。事務所入り口にある来客用のソファでぐったりと寝ている。
そんな時である。事務所の入り口から、二人組が入ってきた。
「おーっす……」
やってきたのは待ち望んだ依頼人などではなく、向日槇、性別男、二五歳、トラブル解決屋「ＮａＮ」社員と。
「疲れた……」
瀧澤咲、性別女、二二歳、同じく「ＮａＮ」社員だった。
「あら、槇君、咲ちゃん。お帰り」
霊華が槇と咲を出迎える。当然のことながら、俺と黒が出勤したときよりも対応が柔らかである。どうやら槇と咲は今まで仕事をしていたようだ。
「ふええ……今回こそ死ぬかと思った……」
「そんなに大変だったの？　暴力団のお手伝い」
「なっ！？」
思わず声を漏らしてしまった。
確かにここはトラブル解決屋。胡散臭い依頼や多少危険を伴う依頼も舞い込んでくることはある。だがそれでも一般人の常識から逸脱しないレベルだった。少なくとも、ここに入ってから俺が請け負った依頼は。
しかし。
「ああ、わりと大変だったぜ。なんせ機関銃持ち出してきやがって、相手の組。拳銃くらいならまだ楽だけどよ、盾にしてた車が吹っ飛んだ時はさすがにビビったぜ」
「ビビっただけで済む槇君はいいよね……。はあ、私なんか本当に生きた心地がしなかったよ」

「あらら。まあ、お疲れさま」
事務所の面々は誰も皆、平然としていた。
ちなみにそのとき俺は唖然としていた。
「あ、シャワーさっさと使ってきなさいな、芳樹君」
「あ、はい……」
あまりの「世界」の違いに面食らった俺は、半分無意識でふらふらとシャワールームに向かった。

シャワーを浴びながら、いろいろなことを考えた。
自分は本当にこのままこの事務所で働いていていいのか。ここで働くことによって死ぬことはないのか。また、誰かを死なせるようなことはないのか。
先ほど槇と咲がしていた話からすると、どうやら二人は暴力団の手伝いのようなものをしていたらしい。銃撃戦があったようなことを言っていた。にわかには信じがたいことだが、もし事実なのだとしたら、相当に危険なことに足をつっこんでいることになる。
これは、誰がどう見ても、ヤバい。
「ん……ああ、お前か」
シャワールームから出ると、黒がソファーに座っていた。彼女も女性用のシャワーを使っていたようである。濡れた髪をタオルで拭いているところだった。
「社長、聞きたいことあるんですけど」
「どうした？　ビビったか？」
見抜かれていた。
「……はい、正直」
「プッ」
「笑わないでくださいよ！　ああ、もう。……あんな仕事、よくあるんですか？」
「あそこまでのはさすがによくあるとは言えない。まあ、多くて月イチだ」

「十分多いですよ……」
「安心しろ、今のところお前にそういう仕事を回す気はない。だってお前は」
新人だからな。
黒は、そう言った。
「まあ、もうそろそろお前がここにきて二ヶ月……ってとこか。新入社員も、この頃になると、この仕事がどれだけヤバいもんかってことに気づく。それで大抵の奴は三ヶ月でやめていく」
「……」
「まあ、あいつらは三ヶ月過ぎてもずっとここにいる奴らだからな。根性ある」
「社長」
俺は覚悟を決めて、こう切り出した。
「教えてください。ここが、どんな会社なのか」

最初はな、アタシ、一人で始めたんだ。
トラブル解決屋なんて胡散臭いこと始めようと思ったのは、金が欲しかったから。
そもそもの前提として、アタシにはそういう「裏」とのつながりみたいなもんがあった。実家がヤクザでな……テキ屋系の。ああ、テキ屋の意味が分からないんだったら、辞書で調べてくれ。
話がそれたが、まあそんな感じでアタシは汚いことやってる金持ちの知り合いとかいっぱいいたんだ。そいつらは大抵その「汚いこと」でいろいろ困ってる。そこに目を付けた私は、そいつらから何とかして金を搾り取ってやろうとして、こんな会社を作ったのさ。
少しずつ得意さんの依頼主とかもできはじめて、経営は軌道に乗った。当然危ない仕事や犯罪まがいのことも沢山やった。そうしなければ、生きていけないからな。
お前も知っていると思うが……というかその側面しか知らなかっただろうが、当然悪人ばっかりから依頼を受けているわけじゃない。

最初の頃はそういう「普通じゃない」依頼の方が多かったが、今となってはなんてことはない、善良な一般市民からの依頼が九割だ。そしてそのほとんどは、どれだけ高くても一回三万円とか、常識の範囲内の額で受けている。

……ああ、昨日のお前からの依頼は六万ぶんどったが、ありゃ特別だ。アタシはあそこまで外道じゃない、一般人にはな。

ただ、当然一つにつき三万とかの依頼で社員たちの給料も払えるわけがないしな。依頼の数自体が少なすぎて。

だからこその、汚くて危ない依頼だ。

金が入る。

実はな……お前には黙っていたが、他の社員は完全歩合制だ。給料がまともにでてるのは、現時点では新人のお前だけだ。

ここにいる奴らは、まあ基本的にその報酬の多さに魅了された人間だと思っていい。ああ、悪人ってわけじゃないぞ？　金は大事だ。あいつらも、大金が必要な事情を抱えてたりするんだよ。いろいろと、な。

まあまず間違いなく向日だけは私欲だろうが。

また話がそれて行ってるが、まあこの会社の実状はこんなもんだ。どうだ、驚いたか？

何、無理する必要はないさ。今のを聞いてここを出て行きたくなったなら、そうするがいい。私も無理には止めようとも思わない。

命の保証もできないしな。

もちろん、お前に危ない依頼を回さないようにもできるけどな。私はそれでも良い。お前がここに残ってくれるだけで大歓迎だ。

お前が決めろ。

これはお前の問題だ。

ここで働くか、否か。

今すぐに決める必要はないが……いずれ結論は出してもらう。わかったな？

第四話　葛藤

「ねえ、どうしたんですか芳樹君？　なんか頭抱え込んでますけど」
「どうやら、社長がまたなんかしたらしい」
ごすっ。
「言いがかりはよせ、向日。私はただこの会社の実態をありありと話しただけだ」
「ちょ、社長、物理はだめ物理は！　音が、音が生々しい！」
「まあ、そのうち元気になるわよ。……今は、そっとしておいてあげましょう」
「そうですね……」
順に咲、槇、（殴打音）、黒、槇、霊華、咲の言葉である。いや、殴打音は言葉ではないが。
俺は、同情されていた。
……正直こんなに良い人たちが、金目当てで危ないことに手を出しているとは思えないし思いたくない。だが、黒の話を聞く限りそうなのだろう。それぞれに金が必要な事情があるということを加味しても、やはり解せない。
二ヶ月前、俺は魔法の力を買われて黒にスカウトされた。今思えば、あの頃からおかしかった。
ただのトラブル解決屋――言ってしまえば、便利屋でしかない「ＮａＮ」に、魔法の力が必要であるとは思えない。黒は初めから、俺に危険なことをさせるつもりで会社に招いたのだろうか。
ふと、昨日のやりとりを思い出す。

――ばかもの。
――自分のことをそんな風に言うな。
――お前はバケモノなんかじゃない、むしろばかものだ。

――……お前は、ちゃんとした一人の人間だろう。

黒は、俺のことを一人の人間としてみてくれている。

今回の俺から黒への依頼も然りだが、この力を持っていて幸福だったことなど、かつて一度もない。いや、ライターをなくしたときには便利だが。

基本的に、俺の力を知った周りの人間は、俺から離れていく。興味本位で近寄ってきた奴も多少は居たが、俺の魔法の危険性について深くしるにつれ、離れていった。

だが、黒は俺の魔法を受け入れてくれた。

事務所の他の面々も、だ。

ここには、俺と同じとまでは行かないものの、似たような境遇の奴ら――理不尽な不幸を背負った奴らが多いからなのかもしれない。黒の言うように、大金が必要になるほどの、何かを。

……槇だけは本当に私欲のためにここで働いていて、本当に興味本位で俺の魔法を受け入れてくれているだけかもしれないが。あの先輩は馬鹿だから。

ここが、俺の居場所なのかもしれない。

だとしたら、俺はここに残るべきなのだろうか。

多少の危険は覚悟の上で、やっていくべきなのか。

結局、その日のうちに答えは出なかった。

「うっわ……ひどいなこりゃ」

「いつもこんなもんですよ。今日はマシな方です」

「いや、すまん……。正直昨日の段階だと、どうせたかが嫌がらせだろうとか思ってたけど、実際に見るとこれはひどいわ」

「思ってたんですね……」

まあ、普段から暴力団の抗争とかに関わっている会社の社長だったら、そういう感想を持つのも仕方ないかもしれない。今だからこ

そそう思えた。
だが、それとこれとは話が別である。
まあ確かに、これはひどい。どう見ても、誰が見ても。いや、俺はもうこのレベルなら見飽きたが。
現在の時刻は午前零時三十分。場所は吉川芳樹、つまり俺の自宅前。
玄関口のドアには、なにやら得体の知れない物体が張り付いている。言葉では言い表せないほどグロテスクで、かなりきつい異臭を放っている。
本当に……なんと言い表せばよいのか。「腐ったパイ生地と嘔吐物を混ぜ合わせて赤と紫と黒で着色したもの」とでも言えば想像は……できないだろう。たぶん、今読者が想像しているものの八倍はひどい。もし何かの間違いが起こってこの作品が出版、はたまたアニメ化されたなら、そこには確実にモザイクがかけられるだろう。ブルーレイやＤＶＤでも除去されない……というかそんな修正はだれも望まないほど、とでも言えば少しは伝わるだろうか。
……弁解のために言っておきますが、「赤と紫と黒で着色した」の黒の部分に、社長に対する悪意は込められていませんよ！
「とりあえず、掃除……じゃない、除去、いや削除しないとな……」
「どれだけこの物体に嫌悪感を持っているんですか」
「どれだけってそりゃあ、この世に存在して欲しくないくらいだな。臭いし。ああ、どけたいけど触れそうにないな……」
「任してくださいよ。馴れてますから」
俺は右の掌をその謎の物体に向け、ただひたすら「消えろ消えろ消えろ消えろ……」と念じた。すると、徐々に物体が――臭い煙を上げながら――霧散していく。
「げほっ、げほっ……臭っ！　ああ、この臭いはお得意の魔法でどうにかならんのか！」
「すいません、今消す方に集中してるんで話しかけないでください」
じゅう、と音をあげて物体が完全に消失したのは、それから三十

秒ほどたった頃だった。
「ぐっ……はあ、ひどかった」
「ハァ、ハァ……。ま、毎度のことながら疲れます……あ、ちょっとミスった」
「何だ？」
肩で息をしながら先ほどまで物体が張り付いていたところを見ると、玄関の扉が少し欠けていた。というか、真ん中あたりが抉られていた。
「あーあ……社長のせいで集中が鈍った」
「アタシのせいなのか！？」
「ふぅ、疲れた。ここ賃貸なのに……大家さんに怒られそうだなあ。まあ、とりあえず入ってください。作戦会議です。ああ、今日はちゃんと帰ってくださいよ？　酒も禁止です」
「無視か！」
そんな黒の発言さえ無視して、俺はドアの鍵をあけて中に入った。

落ち着きを取り戻したところで、俺と黒は話を始めた。
「じゃあ、本題に入る……っと、その前に、意思確認だ。今日の話だが……決定をすぐに迫る訳ではないにしろ、その決定の時までどうするかくらいは早めに決めておく必要があるだろ？」
「それはつまり、とりあえず働くかどうか、ということですね？」
「そうだ。もしその決心に数ヶ月もかかるようだったら……そのときまでの生活費はどうするか。『とりあえず』うちで働き続けるか、他に職を探しておくか」
「他の仕事が見つかったら、もうそのままそっちに流れてしまいそうですけどね」
俺はため息をついて考える。
確かに「ＮａＮ」は危ないし、あまりクリーンな会社とは言いがたい。しかし、魔法が使えてしまう俺は、人間関係に難があるというのも確かだ。

一度俺の力が職場で露見（まあ俺が使わなければ済むことなのだが、特に意識せず習慣で使ってしまうことがある）してしまえば、すぐに俺は職場で避けられるようになる。いわゆる「ぼっち」という奴だ。

それに比べると、多少危険であるにしても……いや、危険な仕事は回さないとまで言ってくれているのだから、ここにいた方が良いと思える。「居場所がある」というのは、俺の中ではかなり優先される事項なのだ。

今まで俺には、居場所がなかったから。

「……あんまり危ないことに手を出したくないので結論はもう少し先送りにしておきますけど。『とりあえず』、ここで働きますよ」

「そうか！　いやあ、嬉しいな」

「意外です。社長がそこまで喜んでくれるとは」

「まあ、一応仲間だからな。離れるのはやっぱりあまり嬉しくない」

黒はぽりぽりと頭を掻きながら言った。もしかすると、柄にもなく照れているのだろうか。

いい歳した人に照れられてもそこまで嬉しくはない。

「何か失礼なこと考えてるな、また」

「いやいやいやいや。そんなことないですよ」

「なら、いいが……」

危うく黒のチョップが飛来する寸前というところで、何とか回避できた。

「じゃあ、これからも『とりあえず』がんばってくれよ」

「はい！」

その後、一時間ほど対策を練ろうとしたが、なにぶん手元の情報が少ないので、また何も進展しないまま時間が過ぎていった。

今日の黒は、きちんと帰ってくれた。

第五話　黒の夜

【少しだけ黒の時間】

芳樹の家から出た私は、自宅への帰路につかず、そのまま仕事をする場所へ向かった。

仕事をする場所と言っても、「ＮａＮ」の事務所ではない。依頼人に指定された場所だ。

そこは、とある港の倉庫。よく小説などの創作物で闇取引の場所などに指定されるシチュエーションだが、実際にこういう場所には特に夜は人が寄りつきにくいので、そういった「悪事」に利用される。

港までの移動手段は徒歩または電車。これも依頼人からの指定である。誰も寄りつかないはずの倉庫の近くに車やらが停まっていると、怪しまれやすいからだとか。とはいえ、車で行くほどの距離でもないことも確かなので、徒歩で十分間に合うが。

約束の時間は午前二時。そこで行われるのは、「悪事」と言っても差し支えのないこと。少なくとも絶対に正義や善事とは呼べないだろう。……一般人からすれば。

人は、大金が絡むとそれを否定する。

悪だという。

それは、人に金欲があることを誰もが知っているからだ。欲におぼれることを人は悪と断ずる。

今からアタシがやろうとしているのは、そういうことだ。

金を受け取り、悪事を働く。大抵の依頼主は私を見て「女か」と言うが、きちんと仕事をこなせばそれで文句はないらしい。

アタシは金のためなら何でもする。

生きていくためなら何でもする。

それが、アタシに必要なことなら、何でもする。

人が死ぬのは気分が悪い。だが、金をもらうのは気分がいい。決

してきれいごとでは済まない世界が、ここだ。
だからアタシは引き金を引く。
金を得ることで、大切なアタシの日常を守るために。
今日もアタシは、懐から三十八口径五連発リボルバーの拳銃を取り出し、標的に向ける。
……ああ。
アイツだったら、こんな汚い銃を使わなくても、事を済ませられるんだろうな。
指先から火を生み出し。
掌から塩酸を生み出し。
天から雷を呼び起こし。
先ほどやって見せてくれたように念じるだけで、相手を消せるんだろうな。
血など、見る間もなく。
一瞬で、依頼を解決に導いてくれるのだろう。
ああ。

羨ましいな。

第六話　諭吉が四人

携帯電話から、目覚まし用に設定したメロディが聞こえる。少し前に話題になった、ロックバンド（と言っても、Ｊ－ＰＯＰの大衆向けバンド）の曲だ。

「ん……」

現在時刻は午前八時。昨日は黒が居たのであんな事になってしまったが、普段はいつもこのくらいに起床する。黒が居たからというのが理由になるかは、さておくとして。

俺は布団の中でうずくまった。季節は秋、二度寝が恋しい時期ではあるが、それで会社に遅れては元も子もないので目は開けたままにしておく。これが、いつもの朝の過ごし方だ。

その姿勢のまま、昨日の、もはや何回目かわからない嫌がらせのことや、仕事を続けるかどうかということなどについて考える。しかし、どちらの案件も考えることで解決するタイプのものではない。

「はあ……なんか、疲れるなあ」

そのまましばらく考えてから、ゆっくりと布団から這い出る。改めて携帯を開き時間を確認すると、気づかぬうちに三十分が経っていた。

「うっ、寒い……」

そろそろストーブを出した方がよいだろうか。朝食として食べるパンを二枚トースターに突っ込み、顔を洗い、着替え、その間にトースターから飛び出したパンにバターを塗って食べ、牛乳を飲み、歯を磨いて髪を整える。いつもの流れの中でも、水に冷たさに驚いたり、着替えるときにいつも以上の寒さに身を縮めたりと、季節の移ろいを感じる。

もう、あの事務所で働き初めて……二ヶ月か。

「おはようございまーす」

「あ、芳樹君。今日は遅刻しなかったんだね」
「はい」
「よう芳樹」
「おはよう、芳樹君」
「ＮａＮ」の事務所に着くなり、霊華、槇、咲の三人に声をかけられた。槇と咲は昨日は仕事上がりの出勤だったが、今日は普通に来ることができたようだった。二人ともソファに座って話をしていたらしい。仲の良いコンビだ。「あ、そういうのじゃないから」
「うん。ただのお友だちだよねー」
「いや、まだそこまでは考えてはいませんでした」
「でもたぶん二秒後くらいにはその結論にたどり着いていただろうな」
「うんうん、芳樹君そういう目をしてたよ。お姉さんにはわかっちゃうんだから」
「はあ……」
もう、考えていることを読まれるのにも慣れてきた。俺はそんなに顔に感情が出やすいタイプなのだろうか。
「出やすい出やすい」
「そうですか……」
……もう、慣れてきた。悲しいことに。
「私と槇君幼なじみだからさ、よく間違われちゃうんだよねー。だからもう慣れたよ」
「ああ。慣れたな」
彼らもいろいろ大変らしく、慣れることには慣れ、柔軟に対応しているらしい。見習うべき、なのだろうか。
「幼なじみで同じ仕事か、なんかすごいですね。……ん？」
そのときふと、違和感を感じた。
「あれ？　社長は？」
「ああ、仕事中よ。なかなか帰ってこな……」
霊華がそう言いかけたところで、事務所のドアが開いた。

「よう、幸崎。仕事終わったぞ」
噂をすれば影。ちょうど、黒が入ってきた。昨日の槇と咲の仕事終わりの様子と比べると、かなり元気そうと言うべきか、仕事疲れのオーラが全く感じられない。それほど大変な仕事ではなかったのだろうか。
「あっ、お疲れさまです黒さん。どうでした？」
「まあ、大丈夫だ」
「おはようございます、社長」
「おはよう社長」
「おっはー黒さん」
「徐々にフランクになって行ってるのはどうしだ……？」
ちなみに、俺、槇、咲の順だ。咲の方が槇よりも後輩なはずなのだが、黒に対してのフレンドリー度が高い。同じ女性というのが関係しているのか、どうなのか。
「まあ何でも良いけど、とりあえずアタシはシャワー浴びてしばらく寝させてもらう。悪いけど客の対応頼むぞ、幸崎」
「わかりました。ゆっくり休んでください」
……今、霊華の目が悲しそうだったのは気のせいだろうか。
黒は事務所の奥に歩いて行き、昨日使ったシャワールームに入る。それを見送ってから、俺は霊華に、さきほどの気づきのことー直球で聞くのは気が引けるので、とりあえず関係のありそうなことーを問いただした。
「幸崎さん、社長さっきまで、何の仕事をしていたんですか？」
霊華は少しだけ逡巡するような素振りを見せ、答えた。
「うーん、聞かない方がいいんじゃないかしら……。ああ、それより、ちょっとやってもらいたい仕事があるんだけど、いいかな？」
「え、ああ、はい」
うまく、はぐらかされたような気がした。
霊華から頼まれた仕事は、思いの外簡単なものだった。普段やっ

ている仕事とさほど代わり映えしない。いや、これが普通なのだろうが、やはり昨日今日と事務所の裏の顔を見てしまったので、何となく肩透かしを喰らった気分だ。

依頼人は二十代の男性。何でも、彼女と喧嘩をしてしまい、話しかけようにも話しかけられる雰囲気ではなく、携帯電話も着信・メール受信拒否をされているらしい。本人は謝りたいと思っているのだが、相手が聞こうとすらしないのでどうにもならないそうだ。

そこで、トラブル解決屋の出番だ。トラブル解決屋は、男女間のトラブルだろうが何だろうが請け負う。それがモットーなのである。

俺がやるべき事は、その彼女さんを捕まえて依頼主の男性に会わせること。そこまでだ。それ以降は本人たちの問題ということで、干渉しないことになっている。

この仕事で重要な点は、彼女さんに「彼氏から話があるそうだ」と言って同行を願っても、どうやら拒否されそうだということ。そこで、うまく口車に乗せて指定されたカフェまで連れて行かなくてはならない……のだが、俺は口べたである。それがうまくいくかどうか。

何にせよ、できれば依頼主の男性本人から話を聞いておきたい。依頼を受諾したのは受付の霊華なので、実は詳しい話までは知らない。当然彼女さんがどこにいるのか、どんな容姿をしているかも知らないので、このままでは何模できない。

俺は、依頼主の男性と落ち合う予定のカフェに向かって足を進めた。

「平日なのに、大丈夫ですか？」

「ああ、仕事は有給をとったので……。そちらこそ、こんな事を頼んでしまってすみません。本来、私が一人で片づけるべき事なのに……」

「気にしないでください。こっちも、これが仕事ですから」

カフェに着くと、身だしなみもしっかりした男性が待っていた。

さすがに平日だけあって、人も少ないし、その少ない客のほとんどが女性だったのですぐにわかった。
　男性の外見は、とても痴話喧嘩をするような人には見えない。口調も丁寧で物腰も柔らかい、話しやすい人だった。
「これが、彼女の写真です。今日はたぶん仕事をしています」
　男性はカフェテーブルの上に一枚の写真を滑らせた。
「仕事、というのは？」
「ただのＯＬですよ。まあ、会社に忍び込むのは難しいでしょうからね……昼休みの時間を狙っていただければいいかと思います」
「その時間帯、彼女さんはどちらに？」
「おそらく、あそこに見えるコンビニに来ると思いますので……その近くで彼女を捕まえていただければと」
「すぐ近くじゃないですか」
　正直、自分でやれ、と思った。
　居場所まで分かっているのに、どうして依頼を出したのだろう。
「……実はですね、私が近づいただけで、全力で逃げちゃうんですよ彼女」
「……それは、よっぽど嫌われ……いや、避けられてますね」
「だから、逃げる隙のないこのカフェに何とかうまく連れ込んでくださったら、あとは私がどうにかするしかない問題ですので。お願い、できますか？」
　男性はとても申し訳なさそうにこいらの表情を窺っている。そんな顔をされて、断ろうにも断りようがなかった。
「わかりました。やります。……ちなみに、報酬はいくらですか？」
　トラブル解決屋「ＮａＮ」の料金徴収システムは変わっている。いわゆる定額制ではなく、またこちらが見積もった額で仕事を請け負うのでもない。依頼主が提示する報酬の金額を見て、それに対して仕事を受けるかどうか、会社側が決めるのだ。
「どうしても、お願いしたいことですから……。四万円でどうでしょう？」

「えっ、そんなにいいんですか？」
「はい」
男性は財布の中から諭吉四人を取り出す。報酬の受け渡しは依頼の成功後だが、おそらく現金の用意があることを示すためだろう。嗚呼、懐かしの諭吉よ。六人とは言わない。四人でいい、戻ってきてくれ……。
まあ、報酬の四万はすべて事務所側に行き、俺の手元には決まった給料しか入ってこないのだが。
そういえば、黒が「他の社員は歩合制」だと言っていた。歩合制という事は、働きに応じて給料が増減するという仕組みと受け取っていいのだろうか。だとしたら、黒も槇も咲もかなり稼いでいるのではないだろうか。
霊華だけは、どこがどう歩合制になっているのか、今一つピンとこないが。
「では、よろしくお願いします。方法はお任せしますから、絶対に連れてきてください」
「はい、任せてください」
「あっ、でも口説き落としはできればやめてください。その、彼女があなたに惚れたら、本末転倒ですので……」
「……それもそうですね」
まあ、端から口説き落としなどしようとも考えていなかったが。というか、できるとも考えていない。
「じゃあ、行ってきます」
「頼みましたよ！」
男性はまじめそうな顔をいっそう引き締め、俺に言った。
さあ、わりと面倒臭そうな任務の始まりだ。

第七話　無力感

現在時刻は午前一一時五十分。金曜日、平日。ほとんどの真っ当な社会人はまだ昼休みに入っておらず、働いている頃だ。

そんな時間帯に、女性の写真片手にコンビニの前でずっとうろうろしている俺は……傍から見れば、完全に不審者だった。

「でも……早めに待機しとかないといけないし、顔を見逃しても嫌だから写真を収めておく訳にもいかないしなあ……」

とんだジレンマだ。

女性はコンビニまで昼食を買いに来るらしいから、ここでこうして待っておくしかない。ただ、正直、若い女の人が昼食をコンビニ弁当で済ませるのはどうかと思う。やはり手作りが基本だと思うのだが、案外それがふつうでもないのだろうか。

かく言う俺もコンビニでほとんどの食事を済ませてしまうのだが、やはり理想の女性像というのは保っておきたい。……黒に話したら、家庭的な女などガキの妄想だと一蹴されそうだが。

それはさておき。

たとえ女性を見つけられたところで、依頼内容にあるようにきちんとカフェまで連れていかなければ、解決とはいえない。

確か、男性から口説き落としは禁止されていたはずだ。そもそもできると思っていないが、まあ確かに常套手段ではあった。思いつく前に潰されたというのが何とももの悲しい。

では、どうやって連れ込もう。……連れ込もう、という響きがあまり良いことをしているようには思えないが、この際連れ込む、いや、無理矢理でも引っ張り込むくらいの気持ちで行った方がいいかもしれない。

方法としては。

その一、強行手段、腕力に頼る。これは最終手段だ。

その二、キャッチセールス。自信がない。却下。

その三、ナンパ。いや、口説き落としとナンパは違うんだ、その、言い回しとかが。だがとりあえず却下。
その四、「あなたの彼氏から話があるそうです」。逃げられる、間違いない。というかもうさっき検討したはずだ。却下。
その五、そろそろ作戦が思いつかない。
その六、もう諦めて良いのではないだろうか。
その七、……。
と考えているうちに、依頼主の彼女さんが近くに現れた。オフィスビルから出て、このコンビニにやってくる。
どうする？　まだ、何も対応が決まっていない。
「でも……やるっきゃねえか！」
突撃した。
「すみません！」
彼女さんが俺の方を向いた。だが、まだ自分が呼ばれているのかどうが確信が持てていないようで、怪訝そうな顔をしている。
「あの、そこの……あなたです」
「えっ、私？」
彼女が自分で自分を指さす。
「はい。ちょっと、お伝えしなければいけないことが……」
「えっ……な、何でしょうか」
戸惑ったような表情を見せる。まずい、ノープランだ。
「いや、その……ここじゃあ何なので、そこのカフェにでも……」
「えっ、でも、その、私用事が」
「大事な用事なんです、すみませんお願いします！　そんなにお時間はとらせませんから」
無計画に突っ込んでしまったが、彼女はそこまで気の強い性格ではないらしく、あと少しでカフェに連れていけそうだ、という。
その時だった。
「おい、あんた何してんだ」
「はい？」

背後から男の声がした。直感的に、やってしまった、と感じる。
「人の女捕まえといて何してやがるのかって聞いてんだよ」
「サトシ！」
「サトシ！？」
って誰！？
彼女さんが俺の脇をすり抜け、男の後ろに隠れる。男はとても腕っ節が強そうで、なんというかその、勝てそうになかった。
「あ……す、すいません。人違いでした」
「ああん？　何言ってんだ。ん？　おい、それ、写真……」
「あ、いや！　か、彼女さんと僕の探してる人、に、似てますね～アハハハハハ……。じゃ、じゃあすいません失礼します」
「おい、コラ！」
そんな風に誤魔化してその場を脱兎の如く走り去るのが、その時の俺にできる唯一の選択だった。

「そうですか……あいつ、もう他の男を……」
「すみません、依頼、達成できなくて……」
「ああ、いや、あなたのせいじゃないですから。私が不甲斐ないばっかりにこんなことになったんですから」
事の一部始終を依頼人の男性に伝えると、男性はかなり落胆したような表情だった。まあ、それも仕方がないだろう。何せ、喧嘩をしたというだけできちんと別れを告げられてすらいない恋人に、新たな彼氏ができていたというのだから。
「じゃあ、報酬をお支払いします」
「えっ、でも依頼は達成されていませんが……」
「構いません。どうせ用意していた金ですし、正直今は何もかもがどうでも良くなったというか……」
「はあ」
これで、いいのだろうか。
依頼内容は達成されていないままだ。いや、依頼者側に不備があ

ったのだから、社会的責任の観点から見れば、これで俺の仕事は終わりなはずである。当然、ここで報酬を受け取って帰っても、責められることはないだろう。
だが、釈然としない。本当にこれで、いいのだろうか……。
しかし時は待ってくれない。俺がウジウジと悩んでいる間にも、刻一刻と時間は進む。
「じゃあ、私はこれで失礼します……。今日は本当に、こんなことでお呼びしてお時間をとらせて申し訳ございませんでした」
「いえ、そんな……」
そこで一言、「何か」を言えば、状況を変えられたのだろうか。
少なくともその時、俺の中に状況を変えるような「何か」は存在しなかった。

いつも感じさせられる無力感。
魔法を使えたって……何も、解決できない。人助けもできない。失恋の悲しみ一つも癒せはしない。
俺が事務所に戻ると、社員全員がそろっていた。仕事に出ていたのは俺だけだったようだ。
「おっ、おかえりー……ってうわあ、どうしたのその顔」
咲に声をかけられた。
「あ……瀧澤さん。いや、別に何かあったってわけじゃないです」
「依頼失敗したの？」
「いえ、報酬はきちんともらってきました」
俺がそう言うと、咲は頭上にクエスチョンマークを浮かべた。
「ちょっと、いろいろあって、自分の無力さを感じてきたところ何ですよ」
とりあえずそれだけ言っておいた。
俺は受付カウンターの霊華に報酬の四万円を渡し、来客ソファーに寝転がった。
「おいお前」

黒が俺の側に立つ。見下ろされるというより、見下されるという方が正しいと思えるような、堂々たる立ち姿と鋭い目つきだ。
「そんなに無力な自分が嫌か？」
「嫌ですよ、そりゃあ」
「だったら話は早い。お前の才能を、仕事で生かせ」
翻訳すると、「お前の得意な魔法の力＝絶大な武力で危ない仕事をして稼げ」ということだろうか。
その推測はあながち的外れなものというわけでもないようで。
「ちょっと、今晩吹っ飛ばさなきゃいけない奴らがいるんだ。新人研修の一貫として、槇と咲と一緒に行ってこい」
「今晩ですか。早いですね。準備とかは？」
「ああ、まあ大丈夫だ。大した奴らじゃないから」
俺が言ったのは心の準備のことだったのだが、黒は何を勘違いしたか、武装の準備か何かと受け取ったらしい。最早俺に「行きたくない」と言い張ることすらさせまいとしているのか、あるいは本気で行くに決まっていると思っているのか、判断が付かなかった。
疲弊していた俺に何か返事をする気力など残っておらず、結局無理矢理首を縦に振らさせられる形となった。

第八話　それぞれの理由

「安心しろって。俺と咲がいんだから大丈夫だっつの」
「そうそう、大船に乗った気でいてよね！」
よくあるのは大船を泥船と言い間違えるパターンだが、まあパターン通りに世の中のことは運ばない。そういうものだ。
結局、一仕事終えてもなお悶々としていた俺は、夜十時になると、槇と咲に強引に「戦場」へと引っ張り出された。
現在は目的地に向けて、槇の車で移動中だ。
具体的に何をするのかはまだ知らされていない。だが、今まで俺が請け負ってきたようなつい数時間前にやった、痴話喧嘩の取り持ちなどのような依頼とは、次元が違うということだけは、想像がついた。
槇も咲も拳銃を携帯していて、正直どうして民間人が銃を持っているのかなど問い詰めたいことは山ほどあった。しかし「お前も持っとけ。魔法よりむしろこっちのが武器だろ」と槇に無理矢理拳銃を渡されてしまい、犯罪に荷担しているのと何ら変わりない状態になってしまってからは、最早聞く気など失せた。
初めて装備するホルスターと防弾チョッキの重量は想像していたよりもずっと重く、これから自分が一千の向こう側に足を踏み入れるのだということをひしひしと感じさせられた。
「いいか、芳樹。今日は『一応』そんな物騒なモンを持っているだけで、別に人を撃ち殺せとかそんな依頼じゃない。ただ、話し合うだけだ」
「社長は『吹っ飛ばしてほしい奴がいる』って言ってましたけど……」
「言葉の綾だろ。まあ、安心しろ。俺らもいるしな」
「うーん、その話し合いの相手が厄介なんだよねー。写真で見たけど、なんか目から耳にかけてでっかい傷跡がびいいって」

「ヤクザがらみですか」
「ご名答。ヤクザがらみっつうか、本職だよ」
思わずため息がでる。本当に生きて帰ってこれるのだろうか。
「大丈夫大丈夫、いざとなったら、芳樹君なら手から炎出せば向こうも驚いて逃げるよ！」
「だといいんですけど……」
咲のあまりに楽観的な態度に、正直に言うと、危険なものを感じずにはいられなかった。しかし、これも経験の差なのだろうと納得し、受け入れることにする。
経験と言えば。
「あの……向日さん、瀧澤さん」
「ん？」
「何？」
「お二人はどうして、ここに入ったんですか？」
ここ、というのが、トラブル解決屋「ＮａＮ」を示すということは二人にも伝わったようだった。
「そうだな……やっぱ、金だな」
槇が先に語り始める。
「俺さ、正直言って、バカだからな。でっけえ会社とかにも入れないし、もし入れてもデスクワークなんざ性に合わねえ。かといって鳶とかやっても金は入んねえからな。だったら、一攫千金狙えそうな、なるべく胡散臭い会社に入るしかないと思ってよ」
「槇はそういうところ、意外と賢いと思うよ。堅実じゃないけど、そういうのも必要ってこと分かってるのはすごいよね」
咲が槇をほめる。槇は照れくさそうに顔を背けた。運転中なので前を向いてほしい。
これでデキていないと本人たちがきっぱりと言い切るのだから、驚きである。
「瀧澤さんは？」
「私？　あー、まあ槇とあんま変わんないかな。というか、槇がこ

こで働いてるって聞いて、『じゃあ私もー』ってくっついて来ただけだよ」
「それでよく、こんな危ない仕事、続けられますね……」
「あはは、おもしろい、ってのが一番かもね」
話を聞いていて、この人、実は何本かネジが外れているのではないだろうか、と思った。まともな人間なら、命を懸けることをおもしろいとは感じないはずだが。
まあ、単にそういう性格なだけなのかもしれない。正直、「魔法が使える」というまともでない俺がまともについてどうこう語るのもおかしな話だ。それに人の性格など、一概にどうとは言えない。
「まあ、そんなとこだな」
槇がそう締めくくって終わりかと思いきや。
「ねえねえ、芳樹君は何でここに来たの？　黒さんが連れてきたってのまでは知ってるんだけど、具体的なことは何も聞いてないんだよね」
「あ、俺も聞きてえ、それ」
本当に、この二人は息がぴったりだ。
まあ、特に隠し立てする必要もないだろうと判断し、話す。
「……あまり、聞いてもおもしろくない話ですよ？」

魔法なんて、使えても意味はないんです。
だってどうせ、人前では使えませんからね。
小さい頃はどうして俺が魔法を使うと周りの人たちが離れていくのか、どうして誰も俺以外に魔法を使おうとしないのかが分かりませんでした。それで、習慣的に魔法を使ってしまうようになっていたんですよね。
成長するにつれ、魔法を使うと疲れるとかそういうことも意識し始めたから、あまり使わなくなりました。それだけじゃなくて、自分が他の人たちと違うというのも、一〇歳のころにようやく気づきました。……いや、本当はそれ以前に既に気づいていたけど、認め

たくなかっただけなのかもしれません。
まあそんな風に育ったおかげで、学生時代とかはかなりやさぐれてましたね。そりゃ、環境のせいとかもあるでしょうけど、単に俺が若かったってだけの話です。
そんな俺も高校を出てから……まあ学がないのでまじめに就職したんですが。ちょうど、二年目の秋になる三ヶ月前に、ちょっとしたことで魔法のことが職場にばれて、まあなんというか、会社を辞めざるを得なくなりました。まあそれでもまだこの歳で普通に就職はできたんですけど、やっぱりまた同じように魔法のことがばれて会社にいられなくなるのも嫌でしたから、ニートのまま一ヶ月過ごしました。まあまだ若いから何とかなるとか考えて、適当に生きてましたよ。
そんな時に、社長に会いました。
俺の目の前で、柄の悪いおっさんを蹴っていました。白昼堂々。
おっさんはナイフを持っていて、でももう完全に社長に対して無抵抗になってたんですけど。正直、ナイフ持ったおっさんより社長の方が怖かったです。
喧嘩なのか、仕事なのか、善良な市民の志で犯罪者を鎮圧していたのかはよく分かりませんけど、まあどうでもいいですね。大事なのは……俺が、人質にされてしまったということです。
おっさんは自分のことを俺が見ているのに気づいて、いきなり立ち上がってナイフを俺の首もとに当てました。普通、悪漢と向かい合うのが男で人質になるのが女ですけど、立場逆転してましたね。他に人がいない裏路地みたいな場所でしたし、俺が弱そうだって言うのもあったんでしょうけど。
社長は「しまった」みたいな顔をして、おっさんはそれを機に逃げようとして。
俺はおっさんを燃やしました。当然、魔法で。
死なない程度に焼いて、路上に転がしました。焦げ臭い臭いが充満して、……なんだかんだで人を燃やすのは俺も初めての経験でし

たから、驚いちゃって。
その後はまあおっさんの手足を縛ってから、公衆電話から救急車を呼んで逃げました。魔法で傷を治すとか、そんな器用なまねは難しくてできませんから。放っておいても良かったんですけど、さすがに死なれても困りますからね。
それで、一息落ち着いてからです。
社長が俺を事務所に来るように誘いました。最初は断ったんですけど、「お前の力が必要だ」だの言われて、まあ俺も職がないときでしたから、この際どんな職場でも良いかと思ってＯＫしました。
ざっと、こんな感じですかね。
そんなこんなで、今はここでこき使われてるってところです。

第九話　893の本拠地へ

「壮絶だな」
「壮絶だね」
「って言う割には、二人ともあまり驚いてないような……」
「だってよお」
信号で停止したところで、槇が運転席から後部座席の方を向く。だから、前を向いて運転してくださいってば。
「社長がナイフ持ったおっさん程度に引けを取るわけねえし」
「まあ、芳樹君がいなかったら、まず間違いなくそのまま決着ついてたと思うよー」
「いや、本当、すみません……」
俺が悪いのか。いや、俺が悪いのか？　え？
つい勢いで謝ってしまったが、俺が悪いのか……？
「いや、悪いと思うよー」
「だから心の中を読まないでください」
えひひ、と咲が笑う。これから暴力団の本丸に（話し合い目的ではあるが）切り込もうとしている人間の表情ではない。焦げ臭い仕事に慣れているにしても、限度というものがあるだろう。
この人たちが、俺がつい先日まで見ていた「普通のいい人たち」なのだろうか。俺が見ていた槇や咲とそっくりな別人なのではないだろうかとすら思える。
「まあ、いいんじゃないか。それで芳樹は今ここにいるわけだし」
「そうそう、芳樹君がドジって人質になったりしたから、私たちの今があるんだよ！」
「もう、本当にすみません……勘弁してください」
この人たちの話し相手をしていると、本当に飽きない。というか疲れる。
信号が青に変わり、車が発進する。しばらく、無言の時間が続い

た。槇と咲はただじっと前を見ていて、真剣な表情をしている。先ほどまでの無邪気な笑顔から、急に無表情になったことに、違和感と不気味さを感じた。
「芳樹」
「何ですか？」
「そろそろ、これからやる仕事について説明しとこうと思う」

「ここですか？」
「ああ」
車が止まったのは、出発してからおよそ二時間後の、午前零時。場所は、事務所のある宍島市内から隣の笹玉市に移動、繁華街の裏通りにあるビル。「そういう組織」の建物は、雰囲気だけで分かるものなのだな、と俺は思った。
見ると、玄関口の横に、表札……というよりは看板が取り付けてある。そこには「中堂組」と、厳めしいフォントで書かれてあった。
「……よし、入るぞ」
槇が扉を開けると、見張りらしきチンピラが二人立っていた。チンピラたちは俺たちを見留めるなり、当然のように突っかかってくる。
「ん？　おいおい、誰だよあんさんら」
チンピラに臆することなく、槇が応対した。
「用事があるんだよ。上を出せ」
「ああん？　いきなり出てきた訳分からんガキに会わせられる思うとんかワレェ！」
本当に大丈夫なのか、話し合いで解決するのではなかったのかと思った、その時だった。
「おい、何してやがる」
切れ長の目をした、金髪の男が入ってきた。スーツを着ているが、一見するとヤクザというよりホストのようだ。しかしその男の纏う雰囲気は、見張りのチンピラとは絶対的に違う何かを感じさせる。

「あ、兄貴！　こいつら、いきなり入ってきて、上を出せだの何だのって生意気なんスよ！」
「始末していいっスか？」
「……」
金髪の男は黙ったままそこに立っていた。空気が凍てつき時間が止まる。
と、急にーー
「ぐぇぼっ！」
「がはっ！」
一瞬だった。
金髪の男が、チンピラ二人の鳩尾を的確に殴り、その場にうずくまらせてしまった。とっさのことに、思わず身構える。
しかし、金髪の男の対応は予想外のものだった。
「やあ、すみません。ウチのクソ野郎どもが、失礼をいたしたようで……さあ、上へどうぞ。ボスに、お話ですね」
俺たちに、というよりは槇と咲に対し、非常に丁重な態度で上の階へ行くように言った。

ほんの二、三十分前。車中での作戦会議。
「依頼人は時坂組。まあ分かるだろうが、こっちもヤクザだ。宍島市内をうろついて支配した気になっている小規模な暴力団だ。依頼内容としては、中堂組……こいつらは笹玉の方をシマにしているんだが、その中堂組が近頃宍島に入ってきてるらしくてな」
「入ってきてるって、具体的は？」
「なんかね、宍島市内にお金集めを目的にいろんなお店……あまり人前では言えないようなお店を、どんどん作ってるんだって。で、今日はそれを『やめてください！』ってお願いしに行くの」
「そんな安直な……聞き入れてくれるわけないでしょう？」
「それが、そうでもねえんだなあ」
「そうそう。これこそが、黒さんが一代で築き上げた『ＮａＮ』ブ

ランドの秘めたる力、ってところかなー」
「本当にそんなにうまく行くんですか……？」
「まあ見てろって。お前はとりあえず、こういう裏の現場に慣れるためだけについてくるってだけだからよ。安心しな」

俺は内心、舌を巻いていた。まさかあの胡散臭さ満点の貧乏会社が、裏の世界に名を轟かせていようとは。社員もたったの五人、否、たったの四人だというのに。……俺は「まだ」その世界に足を踏み入れていないのだから、カウントすべきではあるまい。
「中堂は元気か」
階段を上りながら、槇が金髪の男に問う。それも、極めて不遜な態度で。
「ええ、ボスは健在です」
「そうか。ああ、あと、下にいた奴らだけどよ。あそこまでやらなくていいんじゃねえか？」
「いえいえ、『ＮａＮ』の向日様、瀧澤様に失礼があったとあっては、私たちの組もこの界隈でやっていくことは難しくなりますから」
……本当に、どれだけの影響力を持っているのだろうか。こんな組織に所属している自分が怖くなる。
「そういえば、そちらのお方は？」
「あっ、彼は吉川芳樹君。ちょっと前からウチで働いていて、裏の仕事は今日が初めてなんです」
咲に、勝手に紹介されてしまった。
「初めまして。國山と言います。あなたも、きっと今後こちらで活躍なさるのでしょうね……期待していますよ」
國山の目の鋭さに思わず緊張する。
「あ、は、はい、よろしくお願いします」
「……向日様、本当に大丈夫なんでしょうか、彼？」
「心配すんな。意外とやる奴だ」
槇はそう言って、俺の方を向いた。ニタリ、と口角をつり上げる。

面白がっているとしか思えなかった。
「着きました」
話をしながら階段を上っている内に、最上階までたどり着いたようだった。目の前には、大扉がある。ここを開ければ、もう後戻りはできない。そう考えてしまうと、最後の一歩がなかなか踏み出せなかった。
すると、とん、と咲が俺の肩をたたいた。
「大丈夫だよ。言ったでしょ、お話するだけだから。芳樹君は、何も心配しなくていいんだから」
「瀧澤さん……」
普段は抜けていると思っていた彼女が、ここまで頼もしく見えるとなると、いよいよ俺のビビりも最高点に達しているようだ。俺は気合いを入れ直すために、両の拳をぐっと握りしめ、大きく息を吸い、そして、吐いた。
そんな俺を苦笑いしながら見つめていた國山が、扉をノックした。

コン、コン。

それは、俺が裏の世界に足を踏み入れる前の、合図でもあったのかもしれない。

第十部　死んでも

「失礼します、ボス。お客様がお見えになりました」
――誰だ。
「トラブル解決屋『ＮａＮ』の向日様、瀧澤様、それに……吉川様です」
――よし。お招きしろ。
中にいる人物――おそらく、中堂組のトップ――と会話してから、國山がドアノブを捻る。分かっていたことだが、組の長までもが俺たちの会社に「お招きしろ」などと敬語を使うとなると、驚きを通り越し、恐怖さえ感じる。
……ガチャ。
そして、扉が開いた。
一歩、足を踏み出し、敷居を越える。
そこには、咲が車での移動中言っていた特徴に合致する、左目から左耳にかけて生々しい傷跡のある、四十がらみの男がいた。
「ようこそ、我が組へ。どんなご用件ですかな」
男は、威圧間のある声でそう言った。

ソファに着いた俺たち、主に槇と咲は、厚遇を受けた。
「ああ、君が吉川君ですか。……いや、『ＮａＮ』の方に吉川君などと言うのは失礼ですね。吉川さんと呼ばせてもらおう」
「あ、い、いえ。恐縮です……俺、そんな、大した人間じゃあないんで」
「ははっ、面白いことを仰る。あなたの所属する会社の人間に、それもこんな『裏』にまで出向いてくる方々に、大したことのない人間などいないでしょう。……まあ、それは置いておくとして、自己紹介がまだでしたな。私が中堂組の長をやらせていただいている、中堂元剛です」

中堂は、言葉面では俺に対しても槇や咲と同様に丁寧な扱いをしているように見せかけていたが、その目は常に俺のことを量っていた。
「あんまりウチの社員をじろじろ見んのはやめてもらえますかね」
そんな中堂を、槇が窘めてくれた。目の前にいる人間がどれだけ危ないかは見れば分かるだろう。それなのに、槇は全く物怖じしない。
「ああ、すみませんね。あまり度胸のある方には見えませんでしたので」
「中堂さんの目が曇っているんじゃないかな？　彼は、本当にすごいんですから」
槇と同じように、咲の方も、余計な遠慮などしない、否、知らないようだ。
「まあ、そういうことは置いといて、ですよ。……私たちがどうして今日、ここに来たか、見当つきます？」
咲は俺の今まで見たことのないような冷たい無表情になって、中堂に問った。
「……時坂からの依頼、宍島への展開をやめさせろ、でしょう？　どうせ」
「フン、よく分かってんじゃないッスか。なら、話は早い」
槇は奥歯をぎりりと鳴らし、まるで中堂に噛みつくように、脅しをかけるように言った。それに対し中堂は、一瞬躊躇う素振りを見せた後に答えた。
「それは、できません。いくら『ＮａＮ』様からの忠告であっても……聞き入れることは不可能です」
返事は、ＮＯ。
「そもそも……私たちの組は、それほど強くもなければ大きくもない。拠点の事務所もここ一つですしな。もっと大きく、もっと強くと欲を張るにしろ、ただただ組が潰れるのを防ぐ防衛線を敷くにしろ、ここらの笹玉だけじゃあやっていけんのです。その辺は、ご理

解、できますよね？」
「ああ、分からないでもないッスけど。でも……そんなことはどうでもいいんですよ」
へりくだる組長に、威嚇する若者。何ともシュールな光景だ。
「……槇君、電話、しよっか」
「……ああ、しゃあない、そろそろしてくれ。これはもう言っても無駄だろうしな」
槇が許可すると、咲がポケットから携帯電話を取り出す。それを見て、中堂はごくりと唾を飲む。
「まっ、待ってください！　いや、それは、宍島への展開をやめるとか時坂のシマに入るのをやめるとか、それはできる訳じゃあないんですけど……頼みますから！　電話だけは……」
中堂は咲の電話を目にして、急にうろたえる。何かあの携帯には秘密があるのだろうか、とは思ったが、事情を何も知らない俺には何があるのかということは分からなかった。
そんな中堂を後目に、咲は淡々と誰かに電話をかける。
「……ああ、もしもし、黒さん？」
電話の相手は、黒だった。
「はい。そうなんです。それで……聞き入れてもらえそうになくって。ええ、いつもの……いいですか？　やっちゃって」
いつもの、とは何だ。一体これから、何が始まろうというのだ。
俺はそう考えてみたものの結局答えは分からず、また咲が電話をしている間にも、中堂の顔は見る見る青ざめていった。
「……あ、いいんですね？　はい、了解です」
パタン、と咲が携帯電話を閉じる。
それが合図であったかのように、槇は――
瞬時にホルスターから拳銃を引き抜き、コックを上げ、標的を照準し、引き金に指をかけ、そして、引いた。

パァン！

乾いた音が、遅れて聞こえる。

その動作の始めから終わりまで、約二・五秒。

中堂が額から血を吹き出して倒れ始める。

机一つを隔てただけの、僅か一メートルほどの至近距離で、脳天を打ち抜かれたのだ。当然、即死。

そして、中堂の体が床を打つ音が発され。

そこで初めて、室内に居た中堂組の面々は思い思いの銃を取り出す。

「遅いよ」

その頃には、咲が携帯をきちんとポケットにしまった上で拳銃を引き抜き、構える。

その銃に照準されたのはもちろん銃口が一つしかないので一人だけだが、その場にいる全員が動かなくなる。動けなくなる。

槇と同様、引き金を引くまでにタイムロスがない。

そのタイムロスのなさの所以は、引き金を引くことへの躊躇のなさに起因している。

乾いた音とともに発射された弾丸は、中堂組の構成員の急所を的確に打ち抜いていく。順々に。左から。そして、打たれた人間たちは、数秒かけてゆっくりと、呆け顔で倒れていく。

「……國山、どんまい。お前のことは忘れる」

槇が呟いた。

何事が起きたのかを俺が理解しきるころには、部屋の中には俺と槇と咲、三人しか居なかった。あとの床に転がっているものは、ただの屍、言うなれば物体である。

派手なアクションなど何一つ起こさない。ただ、咲の携帯電話が

二つに折られた瞬間に、二人は作業のように人間を殺し始めた。そのことに、俺は戦慄した。
「……まあ、こういうことだ。俺たちがやってるのは」
槇が、ゆっくりと、そんな言葉を口にする。
「これが現実だ。俺たちはプロだ。何があっても依頼は達成しなければならない。たとえ、人を殺しても、だ」
「……はあ」
俺は、別に人を殺した槇や咲を咎めるつもりはない。ただ、聞いておいても良いはずだ。
これからこの仕事で食っていく予定の俺には、聞く権利があるはずだ。
「どうして、こんなことができるんですか」
「芳樹君」
咲が答えようとする。
「黒さんにね、三つ、言われてることがあるんだ。私たち」
「ああ。社訓、みたいなもんか。よし、そうだな、これからお前に伝授してやろう」
極めて真剣な表情の槇は、腕を組み、声を張り上げた。
「一つ！　死んでも依頼は達成しろ！　一つ！　死んでも刃物で人を傷つけるな！　そして……一つ！」
そこで、槇は一旦言葉を切り、俺の方に向き直る。
「死んでも、死ぬな」
それが一番重要なことだ。そう言わんばかりに、槇は目を瞑る。そして、開く。咲の方も、うん、と強く頷く。
「私たちは、はっきり言って、お金のために働いているにすぎない。まあ、私は面白いからやってるってさっき言ったけど、別に人を殺すのが面白いって言うんじゃないよ？　ただ、その過程が面白いし、頑張れてる、生きてるって実感できるから、やってるんだ。それもこれも、この社訓のおかげ」
「ああ。俺は金のためだが、この社訓があるからやっていける。何

せ、社長直々に『死ぬな』って言ってくれてるんだ。……ああ、何て言えばいいのか」
「ここに、私たちの居場所があるんだよね」
「そう、だな。むしろここにしかない感じだ」
「だから私たちは働いているんだよね。どんなに危険でも」
「……ああ、違いねえ」
そう、槇と咲は言った。その話は、彼らもこれまであまり良い境遇に居たわけではないということを彷彿させた。少なくとも俺はそう感じた。
ここにしか、居場所がない。
それは、俺も同じだから。
ただ、一つ気になることがあった。
「あの」
「ん？　どうしたの、芳樹君？」
「『死んでも刃物で人を傷つけるな』って……どういうことですか？」
「ああ、それね」
咲が苦笑いして、首を捻りながらいう。
「なんか、私もよく分かってる訳じゃないんだけど、黒さん、刃物嫌いらしいの」
結局、黒の好き嫌い、気分次第でこの会社は回っている。
いつも通り。裏の世界でどれだけ顔が広かろうが、結局は「ＮａＮ」だ。
「んじゃ、やるか」
槇が唐突に切り出した。
「えっ、やるって何を？」
「あんまり良くない仕事用戦闘員になれるかどうか、テストだよ！」
「組長とか撃ったからなあ。もう、下の階からわらわらと悪人面した奴らが来るだろうよ」
「ええ！？」

言われてみると、下階から続々と足音が聞こえる。聞いた限り、かなりの大人数だ。
槇と咲の銃声は
「殺されないように、がんばってね！　……あーあ、私もがんばらないと。もう、本当、怖いのはイヤだなー」
「えっ、ちょっ」
「あとな」
槇が、これで終わりという体で忠告してくれた。
「人を殺すのを躊躇してたら、自分が死ぬからな。死ぬな、生きろ、そのために殺せ。どうせこいつらはろくでもない人間だ。そう、割り切れ」
その言葉が終わる頃には、バタンという音とともに、組長室入り口の扉が開いた。
「っしゃあ、行くぞ！」

第十一話　銃撃戦

眼前に迫ってくる強面の男たち。それぞれが、思い思いの銃器を抱えている。その数、目算で三十人。

「多い……けど、まあ行けんだろ」

そんなことを呟きながら、相手に先制攻撃を仕掛ける槇。一人、また一人と撃ち倒していく。

だが、さすがに数が数である。全員を一度に相手取るのは無理があると判断したのか、机の陰に飛び込み、機を窺いながら攻めと守りを切り替えるつもりのようだ。咲も同じようにしている。どうやら、物陰に身を隠すのはこういう場での常識のようなものらしい。

俺もあわててソファの裏に身を隠す。それと同時に、組員からの乱射が始まる。ようやく状況を認識し、応戦してきたらしい。明らかに本職である彼らを相手に、一定時間こちらが一方的に攻撃できる「間」を作り出すことができるのは、槇と咲の熟練度のなせる技なのだろう。

ガンッ！　ガンッ！

パァン！

バララララララララ！

機関銃と思しき発砲音まで聞こえる。建物を破壊してしまうことなど一切歯牙にかけない容赦のなさ。あまりの掃射に、槇も咲も、当然ながら俺も身動きがとれなくなる。

「あいつら！　頭に！　血が昇ってんなあ！」

銃声にかき消されないように、槇が叫ぶ。

「いい、芳樹君！　こういうときは！　弾切れの隙を狙うんだよ！」

咲も同様に大きく声を張り上げる。俺にアドバイスをしてくれる余裕さえあるようだ。

「でも、あいつら多すぎますよ！　同時に弾切れなんか起こさないんじゃ！？」

「その隙を、自分で作るんだよ！」
俺の疑問に答えた槇は、拳銃に弾を込めて、一瞬だけ顔を机の陰から出し、すぐに引っ込める。
「そこや！　おんどら、食らえ！」
関西弁なのだろうか。そんなしゃべり方の、とある組員に感化され、やくざ連中が槇のいる机を狙う。
「な、何やってるんですか！？」
「うっせえ！　いいから見てろ！」
机も徐々に欠けていき、槇が身を隠せるスペースは狭くなる。最早被弾は免れないかに思えた、そのとき。

時が、止まった。

銃声が止む。相手の組員が苦い顔をし、弾倉を準備するよりも早く――
「オラァ、がら空きだ！」
槇と咲が飛び出す。俺もそれに続く。
二人の先輩は端から順に敵を撃っていく。俺もそれに習おうと、引き金を引こうとする。
――あれ、そういえば俺、銃を使うの、初めてじゃ――
ズガンッ！
手首に衝撃が伝わる。それがそのまま肩に伝わる。
弾丸は明後日の方向に飛んでいく。照準はしたつもりだったのに、腕が弾丸を放つ際の衝撃によって、あらぬ向きを向いていた。
そして、俺の右肩は。
「ぐぅっ……！」
外れた。
脱臼である。
「馬鹿！　何やってんの！」
「ぐっ……すいません咲さん！　大丈夫ですんで！」

俺はすぐさま、外れた肩に意識を集中する。上腕を無理矢理動かし、肩にはめようとする。もちろん、念力で。
ぎりぎりと肩が痛む。それに耐えながら、少しずつ力を強めていく。すると突然、バキッという音とともに肩がはまる。
「いっっっっ……てええええ！」
はまった肩にさらに意識を持っていき、痛みを消そうとする。患部を、魔法のベールで包んでいくように。間接の間の炎症を冷やすように。
ようやく、痛みが収まった頃には。
「……遅えよ」
組員は全員、床に倒れていた。
「……す、すんません」
何もしていないのに、俺の肉体的疲労はメーターを振り切った。

組長室から、何人もの男たちの屍を越えて出る。階段を降りて行くと、残党がまだ数名居た。
「ここ、何人入ってんですかね……」
「安心しろ。さすがにこいつらで終わりだろう」
相対した瞬間、槇は躊躇なく引き金を引く。咲も無言で撃っていく。そういえば、普段と比べると咲は無口だ。
「瀧澤さん」
「何？」
「なんか、いつもと違って無口っすね」
「……それは、人を殺すのにへらへらしていられるほど、私も悪人じゃないからね。やっぱり、仕事の時は口数減るよ。説明とかもだいたい槇君に任せっぱなしだし」
応戦しながらこれだけの会話ができるとなると、俺も咲もかなり感覚が麻痺してきているようだ。いや、咲はもうすでに最初からそうだったのかもしれないが、少なくとも俺はこの小一時間の間に変わってきている。

感覚が麻痺しているというよりは、この雰囲気に順応してきている？
「まあ、槇君だって好きで人殺ししている訳じゃあないと思うけどね。私は少なくとも、苦手かな、この手の仕事は」
「でも、面白いって言ってませんでしたか？」
はあ、とため息をつきながらも、咲は引き金を引く手を止めない。ちなみに俺は先程の失敗から学習し、取りあえず待機している。素人がみだりに銃を使うものではない。
「依頼を解決するのが、私が面白いと感じるところなの。依頼主さんの役に立ててるし、黒さんや霊華さん、槇君の役に立ててる。お金も入る……って、これは槇君の専売特許だっけ。とにかく、私はそのプロセスよりも結果が好きなの……っと！」
最後の一発で最後の一人を倒し、一息つく咲。
「ま、芳樹君も、頑張ってね！　帰ったら、銃の撃ち方教えてあげるね」
「う……そ、そうですね」
この仕事を続けていく上では、必須になってくる技能なのだ。教えてもらって損はないはずだ、が、やはり少し躊躇ってしまう。そもそも、銃刀法違反……というか殺人までしているというのは、やはり冷静に考えると大変な犯罪である。それでも、ここでやっていくしか俺にはないのだが。
そんなことを漠然と考えていると、突然槇が声を上げた。
「どけえ！　芳樹ぃ！！」
ズガン！！
次の瞬間。
俺は槇に突き飛ばされ、一緒に床になだれ込む。何が起こったの

か理解できず、少し首を左に傾けると、床には弾痕がぽっかり。そこから、白煙があがっている。
「チッ……」
「國山！？　確かにさっき、撃った……」
先程まで俺が立っていた位置から数メートル後ろ。その位置に立っていたのは、金髪。ホスト風の容姿。紛れもない、國山だった。
「やっぱり、ダメですよね、こんな組じゃあ。あなた方には、勝てない……」
そんなことを呟きながら、俺たちの方へさらに、ゆらり、ゆらりと近づいてくる。
ゆらり、ゆらりと。
体を左右に揺らしながら。
「ええ、そんなことは分かりきっていましたとも……あの段階、中堂があなた方の要求を呑まなかった段階で、私と組との決別は確たるものとなりました……。そして今は、新しい、別な目的を見つけましたよ」
國山が、銃に弾を込める。明らかな攻撃準備行動。
それなのに――
「む、向日さん！　瀧澤さん……！」
「無駄ですよ……止めましたから」
國山は、じろりと俺の方を見る。
「さあ……存分に、楽しませてくださいよ！　なんせあなたは……」
にやあ、という表現がぴったり合うような表情。口を三日月型にし、目は獲物である俺を見据えていて、全く笑っていない。口だけの笑い。
そして、最後通告のようにその言葉を放つ。
「私と、同じ……魔法を扱う人種なのですからね！」

第十二話　魔法戦

「俺と……同じ……！？」
「ええ、そうです。あなたと同じ、魔法の力を持つ者。そして……あなたを捕まえることで私はもっと上へ行ける！　より強い力、より強大な魔法を使えるようになる！」
予想外の事態。
驚愕、そして混乱。脳内がぐるぐるとかき乱される。
そして気づく最悪の状況。
殺し合いにおいて全くの素人である俺にとって、唯一の國山に勝てる可能性、アドバンテージが失われた。魔法、という切り札が。
國山は銃に弾を込め終え、カチャっと音を立ててその凶器を俺の方へ向ける。
「おい……どうして……俺が、魔法を使えると分かった？」
「見ていましたからね。あなたが、魔法で自分の肩を治すところを。あのとき既に私は止血を終え、肉体の再生を始めていましたからね。……さあ、会話は終わりです。存分に、味わわせてくださいよ！」
國山の指が、引き金を引く。
銃弾が音速で放たれる――ことすら、知覚できないまま。
「く……あぁっ！？」
避けようとしたものの、左腕に着弾する。血が吹き出す、かに思えたが。
一滴も、血は出ない。どころか、痛みすらない。
これは何だ、と思った瞬間。
ピキキキキ……！
「これは……！？」
「アイシクル。私の魔法を込めた弾丸……魔弾による凍結効果です」
俺の左腕が、猛スピードで氷に覆われていく。徐々に感覚が麻痺していく。

「くっ、そ！」
左腕に神経を集中する。ただひたすら、燃えろと願い、祈り、左腕に火炎を発生させる。いつもライター代わりに使っていた魔法の効果範囲と威力を変えただけの魔法だ。途端に、ジュウ、という音がして氷が溶けていく。
それだけで、俺にとってはかなりの重労働だ。
「はあ、はあ……」
「やれやれ、予想していたとはいえ実に興味深い。魔道具も儀式もなしでそこまでの力が使えるとは……末恐ろしいですね。ですが、それほどに疲れがたまる技、乱発は不可能でしょう！？」
ガンッ！　ガンッ！
國山が立て続けに「アイシクル」を撃つ。周囲の壁やら床やらが凍り付いていく。俺は何とか物陰に隠れてやり過ごすが――
「いいんですか！　こっちには向日様も滝沢様も取り残されているんですよ！」
「くっ！」
――人質をとられていては、出ていくほかはない。そう、二人は國山の使った何らかの魔法で倒れたままだ。俺は、外れた肩の治癒と発火による腕の解凍、二度の魔法使用で疲労困憊の体を引きずり、國山の攻撃範囲に入る。
「うおお！」
右腕を突き出して國山を狙う。ドラゴンクエストで言うと、ザラキにあたる、絶対死の魔法。「シネ」という言葉で、脳内を満たす。俺の魔法に特別な儀式は不要だ。ただ、願い、祈ればいい。
右腕から、見えない、けれどどす黒いことが分かるオーラが國山の方に向かって伸びていく。それは人の手、いや、悪魔の手の形に変化して國山の首をつかむ。
だが。
「無駄ですよ……そんな強度の低い魔法で死ぬのは一般人くらいです。魔法使いたる私には効かない！」

國山は銃を自分の首に向けて発砲する。第三者が見れば自殺行為だが、黒い悪魔の手の存在が感じられる俺、國山からするとそうではない。氷の力をまとった銃弾は悪魔の手に突き刺さり、それを凍てつかせる。それにより、悪魔の手は即座に力を失う。
國山は、平然とした様子で言葉を並べた。
「残念でしたね、あと一歩のところで。あなたはもう終わりです」
「誰がッ……。うっ！？」
「……あの魔法は、生身のあなたには重すぎますよね」
俺の口から、赤くてどろりとしたものが一気に飛び出る。
喀血。初めてその言葉を実感する。体感する。
……ああ、これが血か。
血と共に、全身から力が抜けていく感覚が俺を襲う。苦しさに呑まれる。
もう、だめだ。動けない。動かせない。指一本でさえ。
「ごほっ！　ごほっ！」
「フッ……魔道具なしで魔法を使うことのリスクも、魔道具が何なのかも、そもそも魔法が何なのかすら、知らないのでしょうね、あなたは。ですがそれで良いのですよ。ただあなたは私に捕獲され、国際魔法機関への手みやげになってくれればね」
國山が、血を吐いて倒れた俺に銃を向ける。あの銃にはさっきと同じ、「アイシクル」が入っているのだろう。
もう、動けない。弾丸を避けるのは無理だ。おそらくこのままだと、俺は死んでしまう。……いや、國山に捕らえられ、「国際魔法機関」とやらへ送られてしまうのだろう。
それなら、いっそ――！
「う、おおっ！」
全身から炎を吹き出す。死力を尽くして。周囲のすべてを焼き払うように。俺の体が、そのまま燃え尽きてしまってもいいというくらいに。
「クッ！？　まだ、そんな力が！」

とっさに後方へ跳ぶ國山。それでも俺は炎を止めない。命を燃やすように、ただ周囲を焼きつくす。壁も、床も、高級そうなソファも。中堂組事務所ごと、すべてを燃え上がらせようとするかのように。

「ぐっ！　ああっ！　あああ！　……ごほっ！」

また、血を吐く。やはりこれだけ広域の魔法となると体への負担も絶大なようだ。

もう、本当の本当に限界だ。

そう、思ったとき。

「……もう、いいよ」

何者かが俺の肩をたたく。誰だ。國山か。なら、もっと火を強く、大きく――

「ぐ……ううあああああああ！」

「もういいっつってんだろ！」

頭を拳で殴られる。おかしい。今、俺の周りは火の海のはずなのに。この、声は。

そこには、体の至る所を火傷した槇と咲が立っていた。

驚いて、火を止める。

「む……こうさん……たきさわさ、ん……どうして……」

俺の問いに、まだ体から煙を上げる槇と咲が笑みを浮かべる。

「なんか、凍り付いてたみたいだ、俺たち。國山がなんかした、みたいだな……」

「でもね、芳樹君の炎、暖かかったよ。ありがとね」

「二人とも……」

思わず、目にしょっぱい液体が溜まる。だが、俺も大人なのだ。絶対にそのしょっぱい液体を、流して溜まるものか。

「ここからは、まあ、任せとけ。さっきみたいなヘマはしねえ。ずっと凍って動かない体の中で見てたからな、おまえの戦い」

「うん。すごかったよ。後で祝勝会と芳樹君のがんばり祝いしなきゃね」

「は……はい……はい……」
「おいおいおい、まだこれからだぞ、戦いはな」
「うん、そだね。じゃあ取りあえず、状況を整理しないと」
咲が笑顔から真顔になる。
「あの人に見られたら、私たちは凍っちゃう。あれも魔法なのかな。ただ、芳樹君はあの人に見られても凍らない。理由は分からない。そしてあの人が撃った弾に触るとそこが凍り付く、と」
「そうだな。だから、いかに裏をとりながら、そして早くあいつをしとめるのが重要、ってこった。てなわけで、お前は寝てろ」
槇が俺に言う。だが、その言葉には納得がいかない。
「お……俺、まだ、やれます……。相手は、魔法を、使ってくるから……俺がやらないと……」
しかしそんな俺を槇がたしなめた。
「何言ってんだ。死にかけてやがんじゃねえか。お前、この仕事続けていくんだろ？　だったら、体は資本だ、大切にしろ」
二人は俺の前に立つ。それこそ、見た目には俺よりもぼろぼろの体で。
すると、俺が魔法で出した炎により上がった煙の向こう側から、國山が姿を現す。
「末期の挨拶はすみましたか？　向日様」
「ああ。末期じゃあねえけどな。なんせ、ここで死ぬのは……お前だけだからな！」
「やるよ、槇君！」
「おお！」
「フン、一般人風情が……！　魔法の恐ろしさ、思い知らせてやる！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6931y/

ウィザードライセンス

2011年12月8日23時49分発行